

第 2 節 環状木柱列について

環状木柱列が縄文時代の遺構として明らかになったのは、昭和55年夏、金沢市新保本町チカモリ遺跡(旧 八日市新保遺跡)で金沢市教育委員会が実施した発掘調査による。膨大な数量に上る栗の木の半截柱群は、推定径 1 m 近くにもなる材を使った A 環の環状木柱列跡と、それに複合する木柱列、隣接する丸柱跡に集約され、環状集落址の要所に立地するとの想定で、集落内での性格が論議されてきた。チカモリ遺跡の発見以後、真脇遺跡、米泉遺跡などで相次いで環状木柱列が確認され、豪雪地帯である北陸の地域性に絡んだ特殊遺構として閉塞的な性格付けに止まっているのが現在の研究情勢である。

筆者は金沢市米泉遺跡の環状木柱列跡の検討から、集落共同体の規範の中で配置されるのではなく、世帯共同体が所有する高床式倉庫建て上げに伴う祭祀の場と推定し、階層社会における富の再分配が、祭祀の中で意図されていると考えた。木柱は倉庫に使用する板材を得るために割り込まれたのであるが、柱の高さや環状木柱列が径 1 m 近くにもなる材を使用しながら、その規模が巨大化しない理由については考えが至らなかった。

環状木柱列の規模が把握できるチカモリ、真脇、米泉遺跡での各遺構を比較すると、柱の推定径が約0.5 m から 1 m までの幅があるが、全体の径は5.5 m から7.5 m と柱材の幅に必ずしも比例しないのが、特色である理解され、指摘もされている。巨木を柱としながら、建物全体の規模が通例の住居と同程度の規模に止まるのは、通常の掘立柱建物とは異なる視点が必要である。掘立柱建物跡は、柱間の和で規模が、芯々間の距離の積で平面積が示されるが、円形をなす環状木柱列では、外に向いた柱の幅と柱間の距離に注目して考えたい。柱と柱の間の距離は各遺跡ごとに異なり、重複する環状木柱列でも揃えられる事はないが、各遺構で使われている柱の幅の倍数に近いことが読みとれる。丸材を割り込んで得られた板材を並び立てて、環状木柱列が構築されたと考えられ、板材を並び立てる環状木柱列の基本的構造に規制されて、柱材に巨木を使用しても全体的規模が拡大しないのである。板材で囲まれた空間での祭祀が終了した後は、割板は隣接する高床式倉庫で床・壁材として転用され、残された環状木柱列と共に、その大きさを誇示するのである。環状木柱列の地上高は、高床式倉庫に使われる割板の長さに合うものと考えられ、真脇の3.3 m、米泉の3.5 m、チカモリの4.1 m ～5.3 m という値が得られるが、建築学的な検討が必要である。真脇、チカモリ遺跡では数例の礎板が確認されているが、全体に配されることがないのは重い柱材に対して不都合と思われる。一時的な祭祀の場とはいえ、木柱に礎板が配されるのは、他の柱群に対して高さの不足を補う為に置かれたのであろう。また、弯曲する門柱部が柱列に近接して置かれるのは、通例の竪穴式住居とは異なる構造であることを示し、掘立柱建物も想定しにくいと考えている。

環状木柱列を巡る祭祀は、環状集落に規定される集落共同体の枠組みを変え、さらに、地域的な特殊遺構でもなく、後・晩期と時期的に限定されるものではないと考えられ、新たな視点での各地域、各時期、各遺構の見直しが必要と思われる。

第 6 表 各遺跡の環状木柱列一覧

遺跡名	規模cm	柱本数	柱幅cm	柱厚cm	芯々間cm	柱間cm	柱間数	原木数	推定板材数	高床式倉庫cm	柱径cm
真脇遺跡 A 環	750	10	85～99	22～37	216	122	9	5+	18	330×220	40
B 環	620	10	49	16～22	180	130	9	5+	27		
米 泉 遺 跡	550	8	48	14	250	200	7	4+	28	350～250	20
チカモリ A 環	640	(10)	71～89	12～34	180～230	90～170	9	5+	18	530～420	50

参考文献

南 久和 1983『金沢市新保本町チカモリ遺跡―遺構編―』金沢市教育委員会
山田 芳和 1986『真脇遺跡』能都町教育委員会
西野 秀和 1989『金沢市米泉遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
ニュー・サイエンス社 1994『月刊 考古学ジャーナル』7 No.377